

# 村落史



住 吉

## 概 説

緑の田園・豊かな稔り、そして母なる有明海に抱かれた郷土東与賀は、いったいいつ頃からできた土地であろうか。文献や史料によると、町内の住吉・大野を結ぶ道路付近が、戦国末期（一六世紀）頃の海岸線と考えられ、その南方は中世以後の干拓によるものとのことである。『佐賀県干拓史（坤）』を開いて見ると「与賀地区」のことが詳しく説明してある。

佐賀平野はその成り立ちや地質等の上から大きく分けて、北帯・中帯・南帯の三地区に区分される。その中南帯は有明海に面した最も新しい土地で、主に干拓事業によって陸となったものである。その南帯地区に属する旧与賀郷は、更に上郷と下郷に分けられ、わが東与賀町の全部と西与賀町の元相応や高太郎辺りは下郷に入っている。文化十四年（一八一七）の記録の「与賀下郷」には、村名や字それに小路の名まで出ているが、現在の状況と比べて多少違っており興味深いものがある。

立野村（新ヶ江・坂田小路 実久村（鍛冶屋・上町・島の内）下古賀村（作出・今町・平八擲）田中村（上古賀・田中・作り出・新村）住吉村・中村・大野村・丸目村・中飯盛村（大屋敷小路・辻小路・江副小路）下飯盛村（長八小路・石丸小路・山田小路）元相応村・高太郎村

この「与賀下郷」を所轄した県や郡の区画も時代と共に変更されて、明治五年の頃の佐賀郡は下古賀村・上飯盛村・田中村その他高太郎村・鹿子村・相応村・厘外村・末次村・有重村となっている。それが明治九年五月に

は「三漕<sup>みづま</sup>県佐賀郡」となり、同年九月には「長崎県佐賀郡」と変更された。これが明治十六年七月に「佐賀県佐賀郡」と変り、同十七年には各村に戸長が置かれ戸長役場ができ、同二十二年三月二十三日に町村制が施行された。この町村制の施行に伴って、下古賀村・田中村・飯盛村の三村が合併し、初めて「佐賀県佐賀郡東与賀村」の現在の村名が誕生し、その初代村長として古賀助作（大野）が選出され就任したのである。

以上のような地理的・歴史的な経過をたどって現在のような各村落が形成され、そして年々歳々と発展し繁栄しつつ今日に至ったのである。

## 一 立 野

立野は東与賀町では東北の端に位置し、東は八田江を隔てて川副町に、北は佐賀市本庄町に境をしている。貞享年中（一六八七）の郷村一覽には、立野村の小字に「新ヶ江」が記載されているので、少なくとも四百年前にこの村はできていたであろうと思われる。立野—という村落名はどうして生まれたかは明瞭でないが、山口恵一郎の「地名を考える」の説によると「湿性」を表す語として、「野」や「沼」が極めて多いとのことである。この村落も湿地帯即ち干拓により生まれた地名と考えられる。また「野っ原に家が立った」とか、「野の中にしっかりとしたものを立てる」等とも想像されるのである。

現在の世帯数は合計八六で町内でも大きい村落に数えられ、農業二六、建設業二〇、運輸通信七、公務員と卸小売業がそれぞれ六、その他無職等の職業種別である。この北西部の徳富団地の新住宅は、昭和四十九年から出

来たもので、末次く中島線の道路が昭和三十年に完成し、昭和四十一年には中島く立野線が落成開通した。更に立野より船津への道路も完成して、東与賀東部の村落と佐賀市周辺との交通運輸の便は非常によくなった。

この集落の特徴は、本県における「水田酪農」の開祖ともいえるべく、その創始者はこの村出身の故袋正美と下飯盛の故湊田儀一等である。この二人は昭和初期における佐賀県酪農播らん時代を形成しており、その業績について「佐賀県酪農二十年史」に詳しく記載されている。酪農の外農家の副業としての<sup>かます</sup>刈織りが盛んであった。これは終戦後の昭和二十三年頃から急激に高まり、三十八年頃が最盛を極めた。当時の村長故山田八郎、農協専務増田嘉一や中割の吉村竹次等の指導督励もあって、その生産高は年間三〇万枚に達し、

立野の家屋分布と環濠の状況

